大学生リーダー研修会今後の展望

鈴　木　清　彦（愛知学院大学岳士山岳会）

１．はじめに、研修生の現状

登山研修所の大学生リーダー研修会では、研修会で学んだことをクラブに持ち帰って伝達講習を重んじています。その成果はというと、実態は曖昧な部分も否定できない現状です。それは、研修生の日常クラブ活動形態が週２～３回が平均的で、この頻度のクラブ活動では、伝達成果は望めないと思っています。体育会のクラブ活動は毎日が常識です。同じようなことの反復によってスキルを身に着けています。山岳部の日常クラブ活動は主に、「体力の向上」だと思います。成果が効率よく身につくトレーニング理論や方法を学ぶことも大切なことですが、先ずは、毎日身体を動かす習慣付けが大切だと思います。ロープを解したり、束ねたりする動作も、日常から反復していれば、誰でも、素早く、正確に、スマートにできるようになります。毎日走っていれば、誰でも5000ｍを20分は割って走れるようになります。登山研修所はクラブ活動の指導を意図としている機関ではありませんが、研修所で学んだことをリーダーがクラブ員に継承していくためには、毎日のクラブ活動が必須です。研修会の中で、毎日のクラブ活動の主旨、スキルアップの常識を伝え、認識してもらうことも大事だと思います。

山行日数もクラブ活動に比例して減少傾向です。研修所の大学山岳部出身の講師の皆さんが、学生だった頃のクラブ活動は、日常トレーニングは毎日がもちろんのこと、年間登山日数も100日を超えていたと思います。ところが、そんな活動をしている山岳部は全国でも数多くはなかったと思います。しかし、そんな活動をしていた数少ない山岳部に、研修会で出会うことによって大きな刺激を受け、クラブ活動が発展していったクラブもあったことと思います。

近年では、その背景をあまり感じ取ることがなくなってきた気がします。

研修生の平均学年は２年、３年生で、現状クラブ活動日数、山行日数を２～３年行って、リーダー候補として研修会に参加してきます。身体的にも中学、高校と体育会のクラブ活動をしていた学生は少なく、文化会のクラブ活動、または何もしていない学生が多いかと思います。山本正嘉先生の体力測定の結果からも明らかです（登山研修Vol.28参照）。

２．研修会のプログラムと現状

このような研修生が多くなったことで、研修会のプログラムは入山前に準備研修として２日間が用意され、下山後にも研修会総括として、研修をふり返えるという時間も取り入れています。夏山研修会は、岩登り技術が中心でしたが、現在は研修生の志向に合わせて、研修内容を登攀基礎と縦走に分けています。昨年の研修会では、その比率が50対50になりました。春山研修会は、雪上基礎と山岳スキーに分けていて、ばらつきはあるものの、山岳スキー班は多い時には２班構成になることもあります。

こうして研修生志向や、実態に合わせるようにプログラムに工夫がされている中、入山の研修エリアは変わっていません。これは剱沢に研修所の施設として前進基地が用意されていることがあります。夏山研修会で、剱沢周辺で反復研修を行っていた別山

の岩場や御前山の岩場は、劣化が進み、落石等の危険リスクが増し、反復研修には適さない環境に変わりつつあります。そのことで、登攀基礎の研修班は、入山翌日から、ビバークも交えながら、本峰南壁、八ッ峰主稜、源次郎尾根、八ッ峰６峰フェース、時にはチンネと、実践ルートに向かいます。どの研修班も計画に、ポイント地点までのタイムリミットを設定して研修に臨んでいますが、計画通りの研修が行えない研修班も少なくありません。これは、登攀能力ばかりではなく、アプローチや準備のスムーズな行動が整っていないことにあります。

３．私の学生時代のクラブの規律

私が学生の時の剱岳合宿は、剱岳の概念を知る意図で初めは源次郎尾根でした。八ッ峰の岩場には、剱沢を３時に出発して、６峰、Ａフェース、Ｃフェース、Ｄフェースを登攀して、八ッ峰上半を辿って本峰まで行き、剱沢に日が暮れる前には戻っていました。出来ていたのは、昔と今ということではなく、剱岳の岩場に入っていくまでのプロセスだと思います。まず、剱岳の岩場へ行かせてもらえるために、毎週ゲレンデで１日20ピッチの反復が義務でした。私は愛知県なので、ゲレンデは御在所岳藤内の岩場が中心でした。月に約100ピッチを４月～６月まで繰り返し、やっと剱岳の八ッ峰の許可がもらえたわけです。それだけではなく、剱沢から八ッ峰の取り付きまで、２時間以内で行けなければ、取り付くことすらさせてもらえませんでした。チンネは八ッ峰の６峰フェースを完登できなければ、許可はでませんでした。またチンネには三の窓でのビバークは認めてもらえず、剱沢からの往復でした。当然のことながら１日、１ルートしか登れず、２ルート登るには、２日間剱沢から往復していたわけです。私の場合は、指導者や先輩が厳しかったこともあって、このプロセスは平均的ではないかもしれませんが、内容は別として、結果を導くためのプロセスの規律は大切だと思います。

４．今後の展望

平成28年の夏山研修会では、私が担当して初めて、台風の直撃のため入山ができない状況になりました。従ってこの研修会は登山指導者中央研修会と同様に、登山研修所を中心にその周辺の環境を使っての研修会となりました。４日間も限られた環境で研修はうまくまとまるのかと思いましたが、充実した研修会になりました。その一番の要因は「反復」の研修ができたことでした。

剱沢に入山して、スケールの大きい剱岳のフィールドは、「反復」ができる環境が少なく、結果的に、「実践経験」の研修になります。もちろん、リーダーとしてクラブ員をけん引していくうえで実践経験は大切なことであり、その経験をもとに判断をしていくことに役立っていると思います。

しかし、もっと大切なリーダーシップは、目的を達成するためのプロセスを設定して、そのプロセスをこなして得た結果の経験を「規律」として伝えていくことだと思います。研修会も、特に夏山研修では、剱岳のフィールドへ入る前に、反復研修が行える、登山研修所とその周辺を利用した「基礎研修」を構築していき、研修会もプロセスを大切にしているというスタイルを伝えていくことも大切になってくると思います。